

○病院・個室内（朝）

藤康介（72）、背広を羽織る。

藤幸江（65）、康介の手に手帳を握らせる。

幸枝「まあ後は私に任せて」

藤「そっちこそしくじるなよ」

幸枝「もちろん。この日を一番楽しみにしていたのは、きっと私よ？」

幸枝、藤にリュックを背負わせる。

幸枝「くれぐれも死なないようにね」

藤「縁起でもないこと言うな」

○東京の風景

賑やかな街並の点描。

○駅前・路上

サラリーマン風の佐伯（40）と並んで歩く、清楚な容姿の篠宮波美（16）。

佐伯「いや、今日は良い暇つぶしになったよ」
波美「あたしもすっごい楽しかったです。佐

伯さんと一緒にいると、美味しいものいっぱい食べられるし！」

佐伯「なーちゃんは本当、食いしん坊だなあ」

佐伯、波美の頭を撫でる。

波美、顔が曇るがすぐ笑顔に戻る。

○繁華街・広場

若者が点々と集まっている。

それぞれ雑談したり、スマホで動画を撮影したりと楽しんでいる様子。

そこにやって来る波美。

爽やかな風貌の西本卓也（21）、雑談していたグループを抜けて、波美に駆け寄る。

卓也「波美、お疲れ」

波美「お疲れ。はいこれ」

波美、財布から五千円札を取り出して

卓也に渡す。

波美「多分リピート有りかな」

卓也「さすがじゃん。やっぱ波美はこの世界

に向いてるよ」

卓也、波美の頭を撫でる。

波美「やめて」

波美、卓也の手を振り払い周囲を見る。

波美と卓也を面白くなさそうに見ている、女子グループ。

波美「新規の女の子増えてんだから」

卓也「なんか嫌そうだね。仲間増えて、俺は嬉しいけどな」

波美「うざ」

○ネットカフェ・個室（夜）

スマホを持って寝転んでいる波美。

スマホの画面、卓也が曲に合わせて可愛らしくダンスを踊っている動画が流れている。

コメント欄をスクロールする波美。

『たっくんカッコよすぎ』『まじ界限のプリンス』『早く会いに行きたい』などのコメントが溢れている。

波美、起き上がり、財布から三万円を取り出すと、【引越し貯金】と書かれた封筒に入れる。

スマホに着信。

画面には『お母さん』の文字

波美、拒否を押す。

再び着信。

波美、今度は強く拒否を押す。

しばらく画面を見つめるが、それ以降着信はない。

波美「……」

○介護施設・外観（朝）

中規模の介護施設。

○同・更衣室（朝）

スマホを仏頂面で見ている、篠宮晴香（36）。

スマホの画面、晴香から波美へ送信されたメッセージが並んでいる。

『電話出て』

『いつまで無視すんの？』

『何かあっても知らないからね』

『もういいい！ 帰ってくんない！』

メッセージには既読がついている。

晴香「……」

慶子の声「おはよう」

水梨慶子（45）、晴香の隣に並ぶ。

晴香「おはようございます」

慶子、ロッカーを開けて支度を始めながら、晴香のスマホに目をやる。

慶子「また連絡取れないの？」

晴香「もう完全無視です」

慶子「本当、晴香ちゃんはよく耐えてて偉いわよ」

晴香「もうスマホ止めちゃおうかな」

晴香、スマホをロッカーの中に放り入れて着替え始める。

慶子、晴香を横目に見る。

晴香の服の袖から見える手首には、ガ

ーゼが巻かれている。

慶子「あら、またけんしょうえん腱鞘炎？」

晴香「ああ……はい。シッポ剥がれてきちゃうんで、こう……巻いとかない。けど今回は軽症なので」

慶子「そう、大変ね。何か作業で困ったらいつでも言ってね」

晴香「ありがとうございます」

○ネットカフェ前・路上（朝）

ネットカフェから出て来る、波美。

周辺には酔いつぶれて横たわっている女や、ホストに介抱されている女がいる。

波美、女たちを冷ややかに見て去る。

○篠宮家・外観

三階建のアパート。

○同・ダイニングキッチン

ダイニングキッチンをリビングとして
使用し、両隣に二部屋ある横並びの二
DK。

机の上には大量の缶ビールのゴミ。
缶ビールに紛れて、血のついた剃刀と
ティッシュが乱雑に放置されている。
波美それらを冷ややかな目で見る。

○同・外階段（夜）

スーパールの袋を持って、階段を登って
いる、晴香。

○同・ダイニングキッチン（夜）

晴香、入ってきて電気を付ける。
机に散乱している缶ビールのゴミやテ
ィッシュはそのままになっている。

晴香「……」

冷蔵庫を開ける晴香。

中にはラップがしたままの野菜炒めが
入っている。

晴香、波美の部屋へ行く。

○同・波美の部屋（夜）

扉を開ける、晴香。

真っ暗な中、波美がベッドで寝ている。

晴香「ちょっと」

波美「……」

晴香「帰って来るなら連絡くらい入れなさい

よ

波美「……」

晴香「聞いてんの？」

波美「……」

晴香、諦めて部屋を出て行く。

波美、そっと目を開ける。

○同・ダイニングキッチン（夜）

晴香、苛立ちを隠せず、冷蔵庫から野

菜炒めを取り出してゴミ箱へと捨てる。

○同・波美の部屋（翌日・朝）

枕元で鳴っているスマホ。

寝ていた波美、手探りでスマホを手に取る。

波美「もしもし？」

卓也の声「あ、俺。今大丈夫？」

波美「うん。どしたの？」

卓也「急でごめんなんだけど、今日昼頃から出て来れない？」

波美「仕事？」

卓也の声「そう。なんと高級フレンチ食べるだけで三万！」

波美「それ大丈夫？」

卓也の声「何度か利用ある人だから大丈夫だよ。今まで女の子からもクレーム無いし。ただその人、毎回リアルJK指名すんだよね」

波美「そうなんだ」

卓也の声「だからほら、波美あんまり学校行ってないし、空いてるかなって」

波美「……そだね。うん、出れるよ」

卓也の声「まじ助かる！　じゃあ後で詳細送
っとく」

波美「わかった」

波美、電話を切る。

波美「リアルJK：：」

波美の視線の先、綺麗にハンガーにか
けられた高校の制服がある。

○シティホテル・入り口前

立っている波美。

スーツ姿の根本浩次（42）が来る。

波美、根本の動向を見て近づく。

波美「初めまして！」

根本「おお。初めまして。君が？」

波美「はい。よろしくお願いします！」

根本「よろしく。じゃあ早速行こうか」

根本、自然と波美の肩を抱く。

波美「あの、その前に」

根本「ああ」

根本、鞆から封筒を取り出して波美に

渡す。

中身を確認する、波美。

封筒の中には三万円が入っている。

波美「ありがとうございます」

○路上

リュックを背負い、右手で白杖をついて立っている藤。

藤、周囲の人に声をかけようとするが、人々は藤を避けて歩いて行く。

藤「東京の奴らは歩くのが早過ぎるぞ」

○シティホテル・上階レストラン

高級フレンチ料理を食べている、波美と根本。

波美、フォアグラを口に運ぶ。

根本「どう？」

波美「なんか、食べたことない食感です」

根本「美味しくない？」

波美「いえ、美味しいです！」

根本「君は、なんか見てて楽しいね」

波美「見るだけで楽しんでもらえてるなら、
光栄です」

根本「クラスで陽気な方でしょ？」

波美「意外と根暗です」

根本「いや無いね。こんな年上の大人を楽
しませられるんだから」

波美「根本さんって女性からモテますよね、
絶対」

根本「どうして？」

波美「褒め上手だから」

根本「それは自分評価じゃわからないなあ」

根本、笑いながら水を飲む。

根本「そういえば、ここのホテルの部屋取っ
ておいたから」

波美「え？」

根本「仲介してくれた彼から聞いたよ。あま
り家帰ってないんでしょ？」

波美「まあ」

根本「俺はこれから仕事あるし、すぐに出ないといけないけど、良かったら使って」

波美「そのお金無駄じゃないですか？」

根本「無駄かどうかは、お金を使う俺が決めるものでしょ。それに俺こう見えて、無駄遣いできるほどには稼いでるから」

波美「大人の余裕ってやつですね」

根本「なんか好きなんだよね。何かしてあげて、純粹に喜んでもらえるのが。俺、自分にお金使わないからさ」

波美「へえー。じゃあ根本さんと付き合う人は、なんでもしてもらえて幸せですね」

根本「それはどうだろうだろうね」

波美「絶対幸せですよ！」

根本、波美の言葉に優しく微笑む。

○介護施設・室内

ベッドに座っている中川常子（80）、

明らかに機嫌が悪い様子。

晴香、常子の背中を優しく撫でる。

晴香「中川さん、お着替えしましょうよ」

常子「うるさい！」

晴香「汗かいて気持ち悪いでしょ？」

晴香、体を拭く用のタオルを準備する。

晴香を横目に見ている常子。

突然、晴香の腕を掴んで噛みつく。

晴香「痛い痛い！ 中川さん！」

常子、口を離すと、机の上にあった飲

み水を晴香に勢いよくかける。

常子「私にかまうな！」

晴香「……」

晴香の握り拳が震えている。

○シティホテル・廊下

並んで歩いている、波美と根本。

根本「ここだ」

部屋前で立ち止まる、波美と根本。

波美「本当にいいんですか？」

根本「いいのいいの。じゃあ、はいこれ」

根本、波美にカードキーを渡す。

根本「今日は本当にありがとう。ゆっくりして行ってね」

波美「ありがとうございます」

波美、会釈する。

根本、手を振って去っていく。

波美、離れて行く根本を見てから、カードキーで部屋の扉を開ける。

○同・室内

入って来る、波美。

上階の部屋のため、窓から景色が一望できる。

波美、ダブルベッドを見つめ、ベッドにダイブするように倒れ込む。

波美「気持ち」

そのまま暫くベッドに埋もれる波美。

すると、扉が開く音。

波美「!？」

フラッと根本が現れる。

根本の声「お、結構良い部屋だね」

波美「……どうしたんですか？」

根本、手に持っていたカードキーを、
波美に見せるように掲げる。

根本「やっぱり、もう少し君と居たいなあと

思ってた」

波美「え？」

根本「一人じゃ寂しいでしょ？」

根本、後ろポケットから長財布を取り
出し、中に入っている札束を見せる。

根本「いくら希望？」

波美「……」

根本「そんな怖い顔しないで」

波美「……いや、すごい札束だなと思って。

ちよっと見せてくれませんか？」

根本「どうぞ」

根本、波美に近づき財布を渡す。

波美「……本当すごい」

誇らしげな根本。

波美、根本の様子を伺うと、思い切り

根本の股間を蹴り上げる。

あまりの衝撃に悶絶する根本。

波美、根本の財布と自分の鞆を持って、
急いで部屋を出て行く。

○同・入口前・路上

【花屋フェリシテ】のロゴが入ったワ

ゴン車が停まっている。

ワゴン車のバックドアを開けて、花を
取り出している、芦屋小夏（27）。

入り口から走って出て来る波美、藤に
ぶつかる

転ぶ藤。

波美「……」

小夏の声「大丈夫ですか!？」

波美「!」

小夏、藤に駆け寄る。

藤の額には血が滲んでいる。

波美、藤を気にしつつも、根本が追っ
て来てないかに気を取られて、その場
から去る。

小夏「え！？　ちょっと！」

小夏の声に、波美は振り返らない。

そこに、ホテルから出て来る、下野由

紀（30）。由紀は【フェリシテ】の

エプロンを着けている。

下野「ちょっと何、どうしたの！？」

小夏「ちょっと下野さんお願いします！」

小夏、波美が走って行った方へ駆け出す。

○路上

走って来てへたり込む波美。

手には根本の長財布が握られている。

波美、財布を地面に叩きつける。

波美、震える体を押さえ込む。

と、誰かが波美の肩に手を置く。

波美「！？」

そこにいたのは、鬼の形相の小夏。

小夏「あなた、警察行く！？」

波美「……」

○花屋「フェリシテ」・外観

洒落た小さな花屋。

○同・事務所

額にガーセを貼った藤が座っている。

波美、藤に向かって頭を下げる。

波美「ごめんなさい」

藤「いい、いい。こんな怪我日常茶飯事だ」

波美を怒りの面持ちで見ている小夏。

小夏「これ、当て逃げと一緒にだからね？」

波美「……はい」

小夏「ていうかあんたいくつ？ 学校は？」

波美「……あたしのことはどうだっていいじ

ゃないですか」

小夏「あのね、流石に学校とか親御さんに連

絡させてもらうから」

波美「行ってません、学校。親は……居ない

です」

小夏「じゃあどこに住んでるわけ？ 生活は

どうしてんのよ」

波美「……」

藤「まあもういいじゃないか。俺が大丈夫だって言ってるんだから。こんな手当てまでしてくれて、悪かったな」

小夏「でも」

藤「平気だって。それよりよ、ここに行きたいんだけど、お嬢さんたちわかるか？」

藤、ポケットから手帳を取り出し、最初のページを見せる。

小夏「ちよつといいですか？」

手帳には住所が書いてある。

藤「パン屋らしいんだけどよ、誰に聞いても分からないつつんだよ」

小夏「ここならあたし送って行けますよ」

藤「本当か！　それはぜひお願いしたい」

と、扉のノック音と共に、下野が顔を出す。

下野「ごめん小夏ちゃん、中田さんから急遽注文入っちゃって、今から行ってくれる？」

小夏「あーはい！　すぐに！」

下野、そっと扉を閉める。

藤「……」

小夏「……」

小夏、波美を振り返る。

小夏「あんた、ここまで藤さんに付き添って

あげなさいよ」

波美「え？」

小夏、波美に手帳を渡す。

小夏「行けるでしょ？」

波美「……はい」

○介護施設・更衣室前・廊下

腕をさすりながらやって来る晴香。

――扉を開けようとするが、聞こえて来る話し声に手が止まる。

慶子の声「篠宮さん、また切ったっぽいのよ

ね、手首。昨日ガーゼ巻いてたし」

晴香「……」

慶子の声「腱鞘炎なんて誤魔化してるけど、

あれは流石に無理あるわよ」

晴香「……」

晴香、手を口元に持っていく。

慶子の声「不安定な人って、自分のことコン
トロールできないじゃない？ 何するか分
からないから怖いわよねえ」

晴香、爪を噛む。

慶子の声「それで旦那に出ていかれたわけだ
し、娘ちゃんがグレちゃうのも無理ないわ
よねえ？」

慶子の下品な笑い声が響き渡る。

晴香、拳を振り上げるが、その手はや
がて力無く下ろされる

○路上

並んで歩いている、波美と藤。

波美、藤と白杖を交互に見る。

波美「あの、本当に見えてないんですか？」

藤「まあ全く見えない訳ではないんだがな」

波美「どんな感じなんですか？」

藤 「なんと言うか：：そうだなあ。こう、色とかはつきりしてれば、多少の区別はつくんだ。だから、ここにあんたがいるのは分かる。けど、顔の表情までは分からない」

波美 「それでも、普通に街中歩けるのすごいと思います」

藤 「何もすごくなんかないさ。これでもあんたの四倍は生きてるんだから」

波美 「：：四倍」

波美、ふと遠目に報道陣にインタビュ―を受けている数組の若者を見つけて立ち止まる

藤 「どうした？」

波美 「いえ：：」

○居酒屋「フジサン」前・路上

地図のアプリが表示されているスマホ画面。

スマホ音声『目的地に到着しました』

波美と藤、立ち止まる。

波美と藤の目の前、看板も何も出ていない、こじんまりとした居酒屋がある。

藤「着いたか？」

波美「着きましてけど、パン屋さんじゃなくて居酒屋ですね」

藤「居酒屋？」

店の扉には「準備中」の札。

波美「もしかしたら移転したのかも。その探してるどパン屋ってどんなパン屋さんか分かります？」

藤「いやぁ、通っていたのは妻だから、俺はどんな店なのかは全くわからなくてな……」

藤が話していると、居酒屋の扉が開く。

波美、居酒屋を振り返る。

居酒屋から暖簾を持った桐谷詩乃（40）が出てくる

波美「あの」

詩乃、波美の声に振り向くが、藤に気づき顔が引きつる。

波美「この辺にパン屋さんってないですか」

詩乃「さあ分かんないですね」

藤、詩乃の声にピンと来る。

藤「おい、詩乃」

波美「詩乃？」

詩乃「ていうか無いですよ、パン屋なんて」

藤「詩乃。お前、居酒屋をやっているのか？」

詩乃「じゃあ準備があるので」

詩乃、そそくさと店に入って行く。

藤「おい！」

暖簾を見る、波美。

波美「……」

暖簾には「フジサン」の文字。

○居酒屋「フジサン」・店内

扉を背にして立っている、詩乃。

詩乃「……なんで」

○病院・個室前・廊下

個室の扉に、【入るべからず！】と書かれた紙が貼り付けてある。

個室前を通りかかるナース二人組。

ナースA「まだ出て来ないね」

ナースB「立て籠りってニュースでしか見た

事なかったけど、実際あるのね」

ナースA「一週間出て来なかったらニュースになるんじゃない？」

○同・個室内

ベッドに寝転がりながら、どら焼きを

頬張っている、幸枝。

スマホが鳴る。

幸枝、電話に出る

幸枝「もしもし？」

詩乃の声「ねえ、お父さん来たんだけど！」

幸枝「あゝ良かった！ 無事に着いたのね」

詩乃の声「知ってたなら言っつてよ！ ていう

かなんで今更……」

幸枝「今更にも今更な理由があるのよ」

詩乃の声「にしたって急すぎ」

幸枝「急な訃報より良かったじゃない。それ

で、お父さんと話せた？ 今日には詩乃の家
に泊めてもらうって」

詩乃の声「追い返したから」

幸枝「え？」

詩乃の声「いや、まあ追い返したって言うか、
他人のフリしたって言うか、突発的にとい
うか」

幸枝「探して来なさい」

詩乃の声「無理だよ、店の準備あるし」

幸枝「死ぬかもしれないよ」

詩乃の声「そんな、縁起でもないこと」

幸枝、詩乃を無視して電話を切り、た
め息をつく。

幸枝「もう大人なんだから、いい加減にして
欲しいわ」

○居酒屋「フジサン」・店内

扉を背にして茫然としている、詩乃。

詩乃「……」

○ラーメン屋・店内（夕）

店内は一人客が多く、静寂の中テレビ音だけが響いている。

対面に座ってラーメンを食べている、

波美と藤。

波美「藤さんのこと忘れてましたね、娘さん」

藤「とぼけてるだけだ、あいつは」

波美「けど暖簾にカタカナで、フジサンって書いてありました」

藤「……」

波美「喧嘩でもしたんですか？」

藤「ああ。二十年も前にな」

波美「あたしが生まれる四年も前だ」

藤「そう考えると長いよなあ」

波美「もはや絶縁ですね」

藤「まああいつは、十九で家を出て気楽で楽しかっただろうな。俺のことは、ガミガミ
煩いオヤジとしか思わないんだから」

波美「結構厳しいタイプだったんですね」

藤「そりゃ自分の子どものことに対しては口

うるさくもなるだろ。娘には何不自由のない生活をしてもらいたかったわけだしな」

波美「押しつけだったんですね」

藤「……今思うとな」

藤、シヨボンとしてラーメンを啜る。

波美「ちなみに、パン屋さんはどこ情報だったんですか？」

藤「妻だ。俺が煩いから嘘ついてたんだろ。な。あいつ、毎回パンをお土産に買って来てたんだよ」

波美「そのお土産のパン、美味しかったんですか？」

藤「ああ。こんくらいの蒸しパンでな」

藤、手で小さく輪っかを作って見せる。

波美「居酒屋で売ってるんですかね」

藤「多分な。娘が俺のためにわざわざ作るとは思えない」

波美「娘さんの味だってわかるんですね」

藤「……」

波美「もう一度行ってみますか？」

藤、首を振る。

藤「いや、もうこれで十分だ」

波美「……」

○スナック・店内（夜）

小規模な店内には数組の客たちが、話しながら酒を飲んでいる。

晴香、一人カウンター席で酒を飲んでいる。

テレビでは、【繁華街のビルから投身自殺をした少年少女の特集】が流れている。

晴香、テレビに目を向ける。

テレビ、繁華街にいる若者にインタビュ―をした映像が流れている。

若者A『まあぶっちゃけ、やりそうだなとは思ってましたね。いつも二人でいて、居場所がないって感じでしたし』

若者B『よく笑うし、良い子たちでしたよ。』

この仲間だったし悲しいけど、きつと二

人で幸せになってくれると思います』

若者C 『この街じゃ自殺なんて当たり前前の光景ですよ。異常かもしれないけど、僕たちにとっては普通のことなんで。だからまあ、またか、くらいですね』

晴香、ふと何かに気づく。

晴香「……」

インタビュウを受ける若者の後ろ、藤と波美が映っている

ナレーション 『華やかなこの街で、一体彼らは何を感じ、何に絶望してしまったのだらうか？』

晴香「……」

○繁華街・広場（夜）

警察が巡回しながら、たむろする若者たちに声をかけて補導している。

晴香、周りを見渡しながら歩いている。

卓也の声 「誰か探してるんですか？」

晴香、声に振り向く。

卓也が立っている。

卓也「たまに居るんですよ。家に帰らない
子どもを探しに来る人」

晴香「……あなたは？」

卓也「ここに集まる、子どもたちの救世主、
ですかね」

晴香「……この子」

晴香、波美の中学時代の写真をスマホ
で見せる。

卓也「ああ、波美ならまだパパ活から帰って
来てないですよ」

晴香「パパ活？」

卓也「知りません？ 男とデートしてお金を
もらう仕事です。結構稼げるから、ここに
来る女の子たちは、やってる子多いんです
よ」

晴香「あの、それってつまり援助交際ってこ
と？」

卓也「んーもっとライトなものですよ。あ、
ちなみに無理やりさせてるわけじゃないで

すよ。俺はただ仕事を紹介してるだけなん
で」

晴香「紹介って……あの子まだ未成年なんだ
けど」

卓也「その方が需要あるんで」

晴香、怒りを抑えて踵を返す。

卓也「助けてあげてるんですよ。俺たちは」

晴香、卓也の声に立ち止まる。

卓也、晴香に近づく。

卓也「親もそうだし、学校の先生も、近所の
人もみんな、子どもの異変に気付いても見
て見ぬフリするじゃないですか。だからこ
こに居る子たちは大人を頼らずに、自分の
身を削って生きて行くしかないんですよ」

晴香「……」

卓也「そして、そういう子ほど、よく稼ぐん
です」

晴香「……」

卓也「酒、飲み過ぎると嫌われちゃいます
よ」

晴香、卓也を押し飛ばしす。

晴香「！」

晴香の視線の先、波美と藤が並んで歩いていく。

晴香、波美と藤を目で追いながらその場を去っていく。

卓也、去っていく晴香を見つめる。

根本の声「おい」

声に振り返る、卓也。

そこには疲れ果てた根本が立っている。

○ビジネスホテル前・路上

波美と藤、歩いて来る。

波美「ホテルのベッドっていいですよ。家のベッドよりもフカフカだし広いし、疲れ取れます」

藤「病院のベッドは苦痛で苦痛で」

波美「それは萎えますね。あ、ここです」

波美と藤、ホテル前で立ち止まる。

藤「すぐに入れるのか？」

波美「さっき予約したんで、多分」

藤「何から何まで悪いな」

波美「いえ。私も今日はどこに泊まろうかな
って考えてたところだったんで」

晴香の声「何してんの！」

波美、晴香の声に振り向く。

波美「……なんで」

晴香、波美と藤に駆け寄る。

晴香「触らないでよ！」

晴香、藤を波美から離すように突き飛ばす。

尻餅をつく藤。

波美「藤さん！」

波美、藤を起こそうとしゃがみ込む。

晴香「あんた何してんのよ！　こんなこと……」

……。電話にも出ないし、連絡も返さないで
パパ活だなんて。馬鹿なんじゃないの！？」

波美「……何急に」

晴香「帰るよ！」

晴香、波美の腕を掴む。

波美、嫌悪感をあらわに晴香の手を振り払う。

晴香「こんな汚いことして、あんたそれでいいわけ？」

波美「……あたしただバイトしてただけだよ？　ただ男の人と会って話して、お金を貰っただけ。男の人が食べたい物を一緒に食べて笑ってただけ。ただそれだけ！」

晴香「バイトならもっと他にまともな」

波美「まともって？　スーパーとかコンビニとか？　やめてよ、そんなところで働いたってお小遣い程度にしかないじゃん」

晴香「バイトっていうのは、お小遣いを稼ぐための物でしょ！」

波美「そんなんじゃないで生きていけない」

晴香「何一人って。あたしだって、あたしだってあんたを養うために頑張ってるでしょ！　あんたの携帯代も、高校だって……」

波美「お父さんからお金もらってるじゃん」

晴香「貰ってるから何よ」

波美「それ飲み代にも使ってるでしょ」

晴香「あたしは……あたしはあんたを育てるのに一人でここまでやって来たのよ……。なのになんで分かんないの？　なんで分かってくれないのよ！」

波美「……臭い。酒臭いんだよ」

晴香「……」

晴香「お父さんだってそんなお母さんに呆れて出て行ったんじゃない」

晴香、波美の頬を叩く。

晴香「口答えするな！　親がいなきやまともに生きていけないくせに！」

波美「親がまともじゃないのに、子どもがまともに生きていけるわけないじゃん」

晴香「……」

波美「まともな親はね、子どもを置いて飲みに歩いたりなんかしない」

晴香「……」

波美「まともな親はね、子どもを置いて死のうとも考えない」

晴香「……」

晴香「藤さん、行こう」

波美、藤を起こす。

藤「俺はここでいい」

波美「え？」

藤「親御さんを心配させてしまうようじゃ、

ダメだな」

波美「え？」

藤「あんたは一度、お母さんと話した方がい

い。俺は明日、ここからタクシーに乗って

駅に行くよ」

波美「……明日の朝、迎えに来ますから」

波美、走り去っていく。

晴香「波美！」

藤「……」

ホテルスタッフの声「あの……」

ホテルスタッフ、入り口から申し訳な

さそうに出て来る。

○路上（夜）

歩いている波美。

携帯に着信が入る。

○繁華街・広場（夜）

数人の警察が立っているのを遠目から
見ている、波美と卓也。

卓也「目立って死ぬとこうなるんだな」

波美「……」

卓也「てか、根本に財布返してきてよ」

波美「……あれは正当防衛だよ」

卓也「さっきまでここで、警察行くなって騒いでた」

波美「行っても襲われそうになりましたって
言うだけだし」

卓也「あのさ、なんで俺がわざわざお前に連絡したと
思ってるの？」

波美「……」

卓也「警察なんて行かれたら、俺らにすぐ足
がつくことわからない？」

波美「卓也たちのことは言わないよ」

卓也「言わなくてもバレるんだよ」

波美「……」

卓也「だから頼むからさ、財布返しに行っくんないかな？」

波美「じゃあついてきて」

卓也「あいつお前一人でこさせろってうるさいんだよ」

波美「でも」

卓也「無理。約束破ったら警察行かれる」

波美「……おかしいよ。ご飯食べたり、どこか遊び行ったり、そういう仕事のはずじゃん。なのに大人の関係とか期待しちゃって、悪いの全部あいつでしょ？」

卓也「まあほら、いい社会勉強になったじゃん。楽して金は稼げないってことだよ」

波美「……」

卓也、波美の頭を撫でる。

卓也「根本はただ財布を返して欲しいだけなんだから。大丈夫だって」

波美「……でも」

卓也「俺はお前の親と違って、お前の居場所
を作ってあげただろ？ 頼むよ、な？」

波美「……」

○パーキング（夜）

根本が乗った車が奥に停まっている。

陰から根本を確認する、波美。

——ゆっくりと根本の車に近づく。

根本、波美に気づいて車から降りてくる。

根本「もう、待ちくたびれたよ」

波美「……」

波美、やっぱり無理だと、踵を返して
走り去る。

根本「おい！」

○路上（夜）

泣きながら歩いている波美。

詩乃の声「ちょっと、大丈夫？」

波美、顔を上げる。

詩乃が心配そうな顔で立っている。

波美「……」

詩乃「あれ、お父さんは？」

波美、さらにポロポロと泣き出す。

○篠宮家・ダイニングキッチン（夜）

晴香、お茶を入れて持って来る。

晴香「ここにお茶入れてますので。どうぞ」

晴香、藤の手を取り、誘導して湯呑みに触れさせる。

藤「どうも、悪いね」

晴香「……いえ。ホテルに泊まれなくなってしまったのは私のせいなので。本当に申し訳ありませんでした」

藤「自分の娘が知らない男と居たら、そりゃ怒るさ」

晴香「すみません」

藤、お茶を飲む。

藤「あー暖まる。本当、あんたたち親子はそっくりだな」

静香「え？」

藤「見ず知らずの俺に付き合ってくれるなんて、優しい親子だよ」

静香「……」

藤「娘さんはね、今日一日、目の見えない俺に道案内をしてくれてね。それはもう親切に。美味しいラーメン屋さんにも連れて行ってくれたよ」

静香「そうでしたか」

藤「久しぶりに食べられて嬉しかったよ。娘さんはよく話す子だし、一緒にご飯でも食べながら話せばいいじゃないか」

静香「あたしはもう、娘と二人でご飯を食べることなんてないと思います。娘にはだいぶ嫌われていますから」

藤「嫌われててなにが悪いんだ。俺なんてずっと娘に嫌われてるよ」

静香「……」

藤「けどな、好きから嫌いになることがあるように、嫌いから好きに変化することだっ

てあるんだよ。っていうのは俺の願望だけ
どな」

晴香「……」

藤「けどこうして家を守って、娘を十六歳ま
で健康に育ててる時点で、あんたは立派だ
よ」

晴香、ポロポロと涙を流す。

藤「そりゃどんな親子にも、分かり合えない
瞬間なんて何度だってあるさ。自分とは違
う人間なんだから。けどみんな上手いこと
理解しようとしたり、受け入れたり、時に
は折れたりして絆を深めていくものなんだ
よ」

晴香「そうですよね」

藤「けど俺は、それができなかつたんだよ」

晴香「……」

藤「最後に見た娘の顔に笑顔は無かった」

晴香「……」

藤「もう見れねえんだよな、この目じゃ……。
後悔しても遅いんだけどよ」

藤、弱々しく笑う。

○同・晴香の部屋（夜）

晴香、押し入れから出した段ボールを開け、【波美】と表紙に刺繍されたアルバムを取り出す

晴香「……」

晴香、アルバムをめくる。

○居酒屋「フジサン」・外観（夜）

付いていた一階の電気が消えて、目立つ二階の電気。

○桐谷家（フジサン2階）・リビング（夜）

畳まれた洗濯物が置かれていたり、机にはお菓子などが出しっぱなしの生活感のあるリビング。

波美、膝を抱えて座っている。

階段を登って来る、詩乃。

手には蒸しパンが乗った皿を持ってい

る。

詩乃「はい、夜食」

波美「ありがとうございます」

詩乃「いいのよ。今日は父がお世話になった

みたいだし」

波美「……いただきます」

波美、皿に乗った蒸しパンを手に取り
一口かじる。

波美「美味しい」

詩乃「うちの名物だからね。結構これ目当て
に来る人も多いの」

波美「藤さん、ずっとパン屋さんを探してた
んです」

詩乃「ああ。それはきつとお母さんがそう説
明したからよ。飲み屋よりパン屋の方が、
お父さんは安心しそうだしね」

波美「蒸しパンを探してみました」

詩乃「よくお土産で持って帰ってたから」

波美「……」

詩乃「それね、お父さんの喧嘩がきっかけで

できたパンなの」

波美「喧嘩の？」

詩乃「そう。仲直りの口実に作れってお母さんに言われてね。そういうきっかけが無いと、なかなか歩み寄れない、不器用な親子だったんだよねえ」

波美「……」

詩乃「なのにお父さん、これ作ってあげたときなんて言ったと思う？」

波美「喜んだんじゃ無いんですか？」

詩乃「『こんなの作ってないで、お嫁に行っても恥ずかしくない料理を作れ！』って」

波美「……厳しい」

詩乃「私まだ小学生よ？ 元々古風で口煩い人だったけど、それからもう諦めちゃったの。もう何を言っても無駄なんだなって」

波美「……」

詩乃「親って本当に自分勝手な生き物よね。自分が与える愛とか言葉が絶対だって思ってるんだから」

波美「でも、目が悪いのに、一人でここまで来るって、あたしは凄くなって思っちゃいました」

詩乃「同じ状況になれば、あなたのお母さんもきっと来るわよ」

波美「どうですかね。自分の思い通りにならないから、イラついて探しには来ると思いますが……。それで文句言われるんですよ、永遠と」

詩乃「お母さんも不器用な人なのかもね」

波美「まあ離婚しましたから」

詩乃「そうじゃなくて。どうしたって大切な人には、自分を分かってもらいたいものなのよ。あなたも同じでしょ？　自分のことを分かって欲しいんじゃないの？」

波美「……」

詩乃「あなたの不器用なのね。きっと似たもの同士なのよ。まあ私も気付くのにだいぶ時間かかったんだけどね」

波美「会いたいですか？　藤さんに」

詩乃「会わなきゃな、とは思うかな」

波美「……」

詩乃「それ食べ終わったら送っていくね」

○篠宮家・玄関（夜）

帰って来る波美。

藤の靴が置いてあることに気づく。

○同・ダイニングキッチン（夜）

入って来る波美。

毛布を掛けて寝ている藤。

波美、隣の部屋を隔てるスライド扉が
僅かに空いていることに気づく。

○同・晴香の部屋（夜）

ベッドで寝ている晴香。

波美、床に置かれた写真アルバムを見
つけて開く。

一枚目に生後の写真と【一ヶ月の記録】
が直筆で記されている。

晴香の声「（文面）一ヶ月目、ミルクの飲みが悪くてちよっと困った」

波美「∴∴」

晴香の声「（文面）病院にいる時から全く泣かない子で、お腹がグーグー鳴っていても泣かない。色んな人に大人しく良い子だねと言われる」

○過去の篠宮家・点描（十六年前）

ベビーベッドで眠る波美（0）。

晴香（20）、顔を寄せて呼吸を確認する。

晴香の声「（文面）けど、あまりにも泣かないもんだから、夜中に気を使ってすごく疲れた」

×

×

×

晴香、波美に離乳食をあげている。

晴香の声「（文面）離乳食はカボチャを好んで食べていた。甘いのが好きらしい。子どもらしくて可愛い」

× × ×

晴香、布団を波美に掛ける。

晴香の声「(文面)足をよく動かして遊ぶようになった。布団を掛けても蹴っ飛ばしちゃうからムカつく：：というのは冗談。そのまま元気に育ってくれたらいいな」

× × ×

波美、犬のパズルを指差す。

晴香、波美の頭を撫でる。

晴香の声「(文面)八ヶ月の中頃、ワンワンどこ？ と聞くと、飾ってある犬のパズルを指差して笑っていた。なんて頭の良い子なんだろうと思った。このまま私よりも、ずっとずっと立派に育って欲しい」

○篠宮家・晴香の部屋(夜・現在)

文面を読み、アルバムをめくる波美。

笑顔で映る幼少期の波美と晴香の写真が何枚も貼られている。
涙が波美の頬を伝っていく。

○同・ダイニングキッチン（朝）

目を覚ます、藤。

藤の近くに座っている、波美。

波美「おはようございます、藤さん」

藤、起き上がる。

藤「おお。あんた帰って来てたのか」

波美「はい、昨日の夜、詩乃さんに送っても
らいました」

藤「そうか」

波美「藤さん、これ」

波美、袋から蒸しパンを取り出して、
藤の手に置く。

藤「これは……」

波美「行きましょう、藤さん。せっかく東京
まで出て来たんだから」

○同・前・路上

アパートから出て来る、波美と藤。

そこに卓也が立ちはだかる。

波美「……なんで」

卓也「お前が約束破ったせいで、あいつから
すげえ請求来てんだけど。どうしてくれん
の？」

波美、鞆から根本の財布を取り出して
卓也に差し出す。

波美「これ。お金も取ってないし、なにも盗
んでない。財布を持って行っちゃったこと
はごめんなさいだけど、あの人に謝るつも
りはないから」

卓也、財布を受け取る。

波美「色々と迷惑かけちゃってごめん。でも
もう」

卓也「そのじいさんいくら持ってるの？」

波美「え？」

卓也「迷惑料」

卓也、藤が背負っているリュックに
手をかける。

藤「やめんか！」

波美「ちよっと！」

波美、卓也の腕を掴む。

卓也「お前さ、誰のおかげで生活してこれた
と思ってるの？ 誰が仕事を紹介してやっ
たんだよ！」

波美「……」

藤「あんた誰なんだ。警察呼ぶぞ！」

波美「藤さん、大丈夫」

波美、カバンから【引越し貯金】の封
筒を取り出して、卓也の足元に投げつ
ける。

波美「迷惑料。それでいいでしょ」

卓也「……」

波美「じゃあね」

波美、藤の腕を掴んで歩いていく。

卓也「……」

○路上

波美、藤の腕を掴んで歩いている。

【花屋フェリシテ】のワゴン車が後ろ
から走ってきて、二人の横に停まる。

波美「？」

ワゴン車の助手席の窓が開き、車内から小夏が顔を出す。

小夏「あれ、パン屋さん辿り着けなかった？」

藤、声にピンと来て、

藤「ああ、あんた昨日の！」

小夏「どうも。あ、今度こそ送って行きましようか？」

○ワゴン車・車内

運転している小夏。

助手席に乗っている、波美。

後部座席に乗っている、藤。

小夏「え？ 病院を抜けてきたんですか？」

藤「この歳じゃ、もういつ死ぬかわからないからな。動けるうちにな」

小夏「娘さん、きつと嬉しいはずですよ」

藤「でもこうして助けがなければ、俺は娘には辿り着けなかったんだ。あんたたちには本当に感謝してるよ」

小夏「じゃあ当て逃げも、不幸中の幸いだったってことですね」

波美、小夏の言葉に、罰が悪そうにそっぽを向く。

○居酒屋「フジサン」・店前・路上

泊まっているワゴン車。

波美、ワゴン車から降りようとする藤に手を貸す。

ボタンとバックドアが閉まる音。

小夏、花を抱えて藤に寄ってくる。

小夏「これ、あり物ですけど、良ければ受け取ってください」

小夏、藤にピンクの薔薇の花束を持たせる。

藤「いやいやこんな立派な……」

小夏「二十年越しの仲直りなのに、手ぶらもなんですよ！」

藤「けど」

小夏「いいんです。こんな大切な機会に、私

たちの花が役に立つなんて最高じゃないですか」

藤、花束をしっかりと抱える。

藤「本当に何から何まで、ありがとう」

小夏「では、私はこれで」

小夏、波美を見る。

小夏「あ、これはあんたに」

小夏、波美にカスミソウの小さな花束を渡す。

小夏「思いやりを忘れないこと」

と、微笑んで去っていく。

居酒屋「フジサン」を見上げる、波美。

波美「藤さん。ちゃんと蒸しパンの感想伝えてくださいね」

藤「ああ。お母さんにもお礼言っておいてくれよ」

波美「はい」

波美、藤の手を入り口の取手へと誘導する。

波美「じゃあ、行ってらっしゃい」

藤 「行って来る」

波美、藤から離れて様子を見守る。

藤、ガラガラと店のドアを開ける。

○ 同・店内

詩乃、入り口に背を向けて座っている。

詩乃 「いらっしゃい」

藤、意を決して、

藤 「蒸しパン美味かったぞ。ありがとう！」

詩乃、振り返り、

詩乃 「何よ今更。ていうか何年越し？」

と、呆れたように笑う。

藤、その笑い声を聞いて涙ぐむ。

○ 篠宮家・ダイニングキッチン

晴香、パスタを茹でている

玄関の扉が開く音。

少しして、波美がやって来る。

晴香、黙々とパスタを茹でている。

波美 「藤さんがありがとうって言ってたよ」

晴香「行ったの？ 娘さんのところ」

波美「うん」

晴香「そう。良かった」

波美「……あのさ」

晴香「なに」

波美「あたしもお昼、一緒に食べていい？」

晴香「……」

晴香の肩が小刻みに震えている。

晴香「……明太子とミートソースどっち？」

波美「ミートソース」

晴香「わかった」

波美「あと……夜も、食べるから」

晴香「うん」

波美、作業する晴香の背中を見つめながら、カスミソウをそっと胸に抱く。

了